

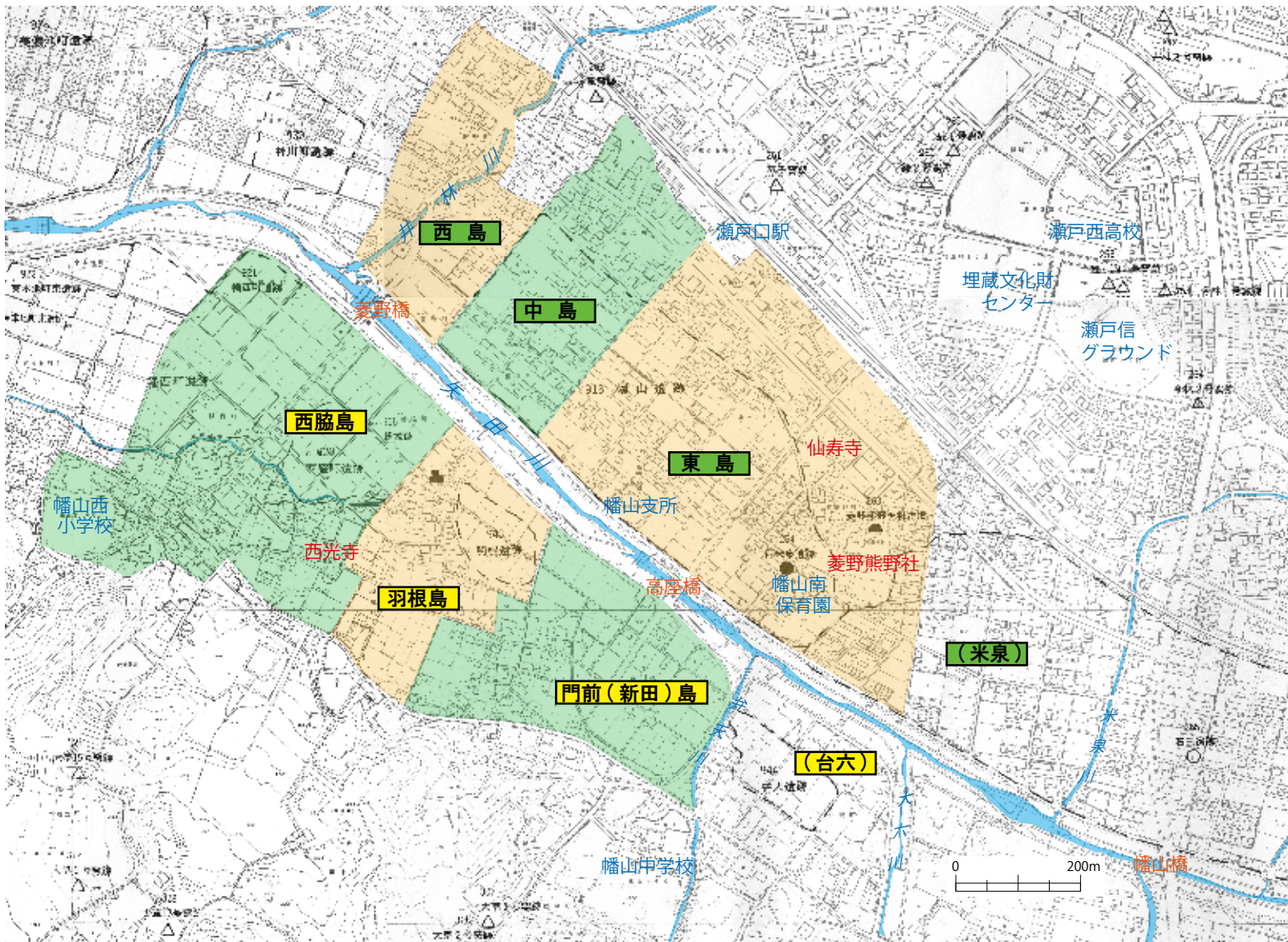
歴史文化基本構想ワークショップ

瀬戸の魅力再発見 まちめぐり Part 4 幡山地区（菱野）

瀬戸市交流活力部文化課

平成28年1月31日(日)

かま が ほら あかしげ
(窯ヶ洞1号窯跡・赤重窯跡出土遺物) → ① (菱野城跡) →
とうふく とうぐら
② 東福寺跡 → ③ 菱野郷倉 (旧郷倉) → ④ 菱野熊野社 →
きたやま せんじゅ
⑤ 菱野城主碑 (北山墓地) → ⑥ 菱野郷倉 → ⑦ 仙寿寺



旧菱野村域のシマ

(瀬戸市教育委員会 1997『瀬戸市詳細遺跡地図』に、
加藤 恬 2001「菱野」『瀬戸市史民俗調査報告書一 幡山・今村地区』の「菱野のシマ」図を重ねて加筆作成)

菱野関連年表

山田氏関連
林氏関連

東福寺関連
仙寿寺関連

熊野社関連
郷倉文書関連
窯業関連

【鎌倉時代】

1184-1190(文治年中) 山田重忠が山田荘地頭に補せらる(『瀬戸古城史談』)。

1200頃~40頃 窯ヶ洞1号窯跡の操業

1221(承久3) 承久の乱で山田氏の属した京方の敗退

1223(貞応2) 東福寺旧蔵「大般若経」の年代が判明する最古巻(巻53)印刷

1247(宝治元) 宝治合戦で、三浦義村旧所領の上菱野村地頭に山田泰親、
下菱野村地頭に山田親氏が任じられたか(『尊卑文脈』)。

【室町・戦国・安土桃山時代】

1517(永正4) 熊野社棟札(郷寶殿再建(「別当 東福寺秀海」銘
(林次郎)左衛門(尉)雅光・浅井□(右)衛門常光檀那))

1522(大永2)か 仙寿寺聖観音坐像胎内仏銘(林二郎左衛門□檀那)

1548(天文17) 熊野社棟札(再興上葺(林左衛門尉光利・浅井太郎右衛門尉□康檀那))

1572(元亀2) 「大般若経」箱が本地村より寄贈

【江戸時代】

1600(慶長5) 熊野社棟札(御寶殿再建)

1638(寛永15) 熊野社棟札(御寶殿再建(伊藤勝九郎重□檀那))

1667(寛文7) 仙寿寺が臨済宗から曹洞宗雲興寺末寺となる。

1705(宝永2) 西光寺が真宗東本願寺派となる(元文4(1739)年から真宗高田派に)。

1735(享保20) 「菱野村産物取調帳」【郷倉文書】

1748(延享3) 上藍天中が菱野大沢家に生まれる。

1748(寛延元) 西光寺が真宗高田派から再び東本願寺派に改派

1800(寛政12) 天中が天草東向寺15世住職となる。

1851(嘉永4) 「菱野村下用書上帳」【郷倉文書】

1862(文久2) 回状写し「猿投山御神事について」【郷倉文書】最古の猿投合宿回状文書

【近代】

1870代~1905? 赤重窯跡の操業

1950(昭和25) 東福寺が廃寺となる。



窯ヶ洞1号窯跡出土遺物



赤重窯跡全景

① 菱野城跡（鎌倉・戦国）・⑤菱野城主碑

矢田川の左岸で、南側からの台地が一部突き出たように接している「羽根屋敷」と呼ばれている地点には、中世に菱野城があった場所であると伝えられています。天保14(1843)年に成立した『尾張志』には「四面に高土居竹藪ありて南大手口の形勢したり内に民戸二烟あり東西三十七間南北も三十七間あり」と記載されています。

P2の村絵図にも、「林治郎左衛門古城跡」と記載され(寛政5(1793)年「菱野村絵図」愛知県図書館蔵も同記述)、室町・戦国時代にP6の菱野熊野社棟札(永正14(1517)年、天文17(1548)年)にも菱野における有力者として名が挙がる(林次郎)左衛門(尉)雅光・林兵衛左衛門光利といった林氏の居城であったものと思われます。

戦国時代に林氏が入城する前は、『尾張志』で「山田氏人の古城址に後追継て林氏の住へりしにやあらむ」と考証されるように、宝治元(1247)年の宝治合戦で、三浦義村が討たれ、その所領の上菱野村地頭に山田泰親、下菱野村地頭に山田親氏が任じられたと考えられることもあわせ、山口(上菱野)城の兄山田泰親とともに弟山田親氏が菱野城を拠点として下菱野のこの地域を治めたものと考えられます。



現在、⑤北山墓地に安置される林治郎左衛門(戒名：右今常德居士)の碑

② 東福寺跡（12世紀～20世紀(1950)）

菱野の東島にあった東福寺は、その創建年代は不明ですが、隣接する菱野熊野社を管理する寺院であったことから、菱野熊野社と同じ頃に創建されたものと考えられます。P6の熊野社棟札(永正14(1517))に「別当 東福寺秀海」とあり、東福寺の僧侶が菱野熊野社の別当を務めていたことが分かります。宝暦2(1752)年に成立した『張州府志』に記載があるように、天台宗で野田密蔵院に属し、境内に薬師堂が存在していたといえます。

昭和25年に無住となり廃寺となりましたが、P5の大般若経などが菱野郷倉に残されました。現在は門と旧薬師堂などが境内地に残されるのみです。



②-1 版本 大般若經（鎌倉～室町）【市指定】

菱野郷倉に保存される「版本 大般若經」は、熊野神社に隣接していた天台宗寺院の旧東福寺が所蔵していたもので、昭和25年に無住となり廃寺となった際に郷倉に移管されたものです。

「大般若經」は、「大般若波羅密多經」の通称で、600巻にも及ぶ大部なものです。禅宗の寺院では、「大般若会」と呼ばれる法要で使用される重要な經典ですが、大部なため全巻を一度に揃えるのは難しく、他の寺院から譲り受けたり、廃寺から入手するなど寺院間で移動することがよくありました。

菱野郷倉には155巻が現存しており、木箱2箱に収納されています。蓋書には「此箱自本地寄進元龜三年」とあるため、元龜3年（1572）に本地村よりこの収納箱が寄進されたことが分かり、その際には288巻があったことが記されています。

中世の大般若經は印刷によるものが多く、奈良の興福寺や京都・鎌倉の禅宗寺院で印刷されていました。郷倉の大般若經は大部分が室町時代のものですが、4巻は鎌倉時代に奈良の興福寺で刷られたものです。

また、經卷の上部には墨書されたものがあり、この經卷が岐阜県瑞浪市釜戸に所在した瑞応禅寺が保有していたことが分ります。この經卷がどういった経緯で菱野の東福寺にもたらされたかは不明ですが、釜戸から菱野、禅宗寺院から天台宗寺院へと地域・宗派を超えて經典が伝わったことになります。中世の遠隔地間の交流を考える上で興味深い資料です。



元龜3(1572)に寄進された収納木箱と東福寺旧蔵大般若經



版本 大般若經

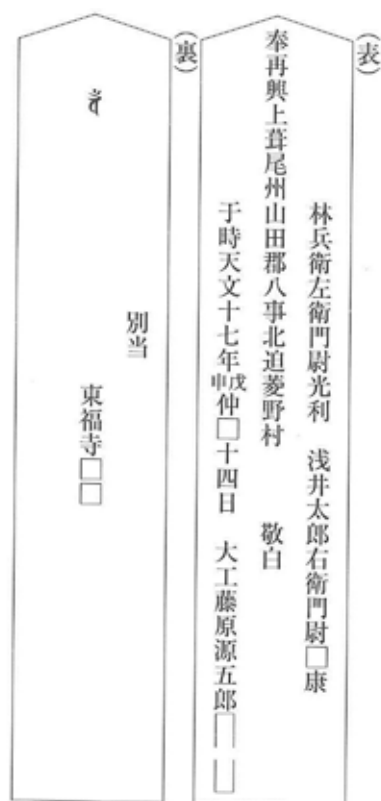
③ 菱野郷倉（旧郷倉）→（P8～10に記載）

④ 菱野熊野社（12世紀～20世紀(1950)）

④-1 熊野社棟札（永正4(1517)ほか）

菱野熊野社は「十二所権現」とも称され、古くから菱野の氏神として祀られてきました。東福寺の僧が寺の守護神として熊野本宮の祭神の分霊を勧請し、この地に社を建立したとされています。東福寺の僧により祭祀が行われてきましたが、明治維新以後は神仏分離により東福寺の管理を離れ、村社としての社格を受け、今日に至っています。

菱野郷蔵にはこの熊野社改修の際の棟札が保管されており、永正4年（1517）から昭和50年（1975）までの32点があります。最も古い永正4年銘の棟札では、「郷寶殿」が再建されたことや、「（林次郎）左衛門□雅光」と「浅井□□衛門尉」が菱野村の有力者であったことが分かります。また、天文17年（1548）銘の棟札には、「尾州山田郡八事北迫菱野村」とあり、古代から中世にかけての郡名である「山田郡」が残っています。この棟札から、山田郡が春日井郡と愛知郡に分割されるのは1548年から1570年の間と考えられています。また、「八事迫（やごととはさま）」は、名古屋市天白区の八事からこの幡山地区までの、尾張東部丘陵内に点在する村落を含む領域の名称で、この時代には北と南に分かれていたことが分かります。但し、山田郡の名称は慶長5年（1600）、寛永15年（1638）の棟札にも書かれており、山田郡が郡制としては消滅した後も地区名称として利用されていたことが分かります。



天文 17(1548) 年銘棟札



永正 14(1517) 年銘棟札

右：永正 14(1517) 年銘棟札 表

左：天文 17(1548) 年銘棟札 表

④-2 菱野おでく警固祭り【市指定】・郷祭りの献馬（江戸～）

瀬戸市域の多くの村では、氏神の秋祭りなどの折に、「郷祭り」と称してそれぞれのシマ（現在の町内規模の単位）から飾り馬を氏神に奉納（献馬）していました。江戸時代の菱野村においても、矢田川右岸（北岸）の「西島」「中島」「東島」と左岸（南岸）の「西脇島」「羽根島」「門前島」から各シマ1頭の飾り馬が氏神である菱野熊野社に奉納されていました。菱野では、今日でもこの6シマの馬飾り（標具（ダシ））が各シマで大切に保管されています。



「郷祭り」の際に菱野の六島から献馬された標具（菱野文化財調査保存会提供）

また、かつては豊田市の猿投神社へ献馬するよう猿投村から山口村を通して山口・菱野・本地等への各村へ呼びかけがあり、山口（北尾張）合宿と称して各村連れだって参加していました。こちらの献馬は、村を代表するもので、標具も「郷祭り」のものとは別に専用のものが用意されました。菱野村は、「おでく」を標具としています。「おでく」は、小牧・長久手の戦いの武将梶田甚五郎を模したもので、菱野村で落ち武者と間違えられて村人に殺された甚五郎の祟り払いとして馬に載せて猿投神社祭礼に参加したことがはじまりと言われています。

菱野郷倉には、山口・菱野・本地・井田・瀬戸川・狩宿・今村の7ヶ村で構成された山口合宿に関する回章が、文久2(1862)年のものから数多く保管されています。明治14(1881)年から郷社である山口八幡社にも山口・菱野・本地・前熊・大草・北熊の6ヶ村が献馬奉納する「郷社祭り」も行われるようになり、次第に大規模な猿投神社祭礼から、いわばミニ合宿版である郷社祭りの開催へとムラ連合の献馬がその主流となっていきます。



合宿で献馬奉納される「おでく」



標具を警固する「鉄砲隊」



標具を警固し、神社に奉納される「棒の手」

コラム

郷倉と資料保存

―菱野郷倉文書を中心に―

瀬戸市域には郷倉文書と呼ばれる資料群が残る。郷倉とは、江戸時代に村に設けられた年貢米の一時保管用の蔵で、江戸時代中期以降は、凶作に備える貯穀蔵として使われた。はじめは村役人の個人の蔵を利用していたが、のちに村で蔵を建設するようになり、明治に入り貯穀蔵としての機能は廃止された。郷倉文書とは、この郷倉に保存された村や自治体に関わる資料群のことである。

瀬戸市域に残る郷倉文書は、現在のところ菱野・本地・今村・美濃之池・片草・白岩・上半田川・下半田川・沓掛の九ヶ村で確認されている。それぞれ近世から近現代にかけての資料が残るが、近現代の資料が多い。そのうち、近世の資料が多く残っているのは、菱野・本地・今村の三ヶ村で、下半田川では数量は少ないものの、近世の山論関係資料が存在し、両半田川村に伝わった国境争論絵図と

関連する資料群が残されている。

郷倉文書には、地区の共有地に関する帳簿、共有費や祭典費などの会計簿や領収書、布達集などが多く残されており、地区に関わる資料が中心である。しかしながら、郷倉文書の内容や伝来の経緯がわかるような資料は、ほとんど見つからないため、なぜ、郷倉で保存されるようになったかについては不明な部分も多い。

地域の郷倉文書は、菱野郷倉文書を除き、現在は郷倉から別の保存場所へ移されている。多くの場合は、町民会館に移されているが、今村や本地のように瀬戸市歴史民俗資料館に寄贈または寄託している資料もある。ここでは、今でも郷倉に保存されている菱野郷倉文書をおもに取り上げ郷倉文書の保存についてみていきたい。

菱野郷倉文書は、二〇〇四年（平成十六）に新築された郷倉に、菱野の氏神である菱野熊野社の祭礼に関する道具類とともに保存されている。新築された郷倉は四代目と伝えられ、それ以前に使用していた郷倉が二棟現存

している。郷倉の管理は地区の郷倉管理委員会によっておこなわれており、委員会では、文化財と考えられる資料は新築された郷倉に、近年の自治会関連資料や行灯・提灯など祭礼関係の道具類の一部はそれまで使用していた郷倉に、と分けて保存している。

資料は、たんす・木箱・金属製の衣装箱・風呂敷にそれぞれ収められていた。現在、これらの資料は市史の調査の際に、中性紙の封筒に入れた後、中性紙の段ボール箱に移し替え、郷倉内に設けられた棚に並べてある。市内の郷倉文書は菱野と同様、たんすに収められていることが多く、ついで木箱が多く使用されていた。また、段ボール箱に収めてある例もみられた。町民会館等への移動の際は、これらの箱をそのまま移動している。

菱野郷倉に残されたおもな資料は、近世の村政に関する資料、近代の自治会関係の資料、近世末から近現代の祭礼関係の資料などである。近世の資料は、金属製の衣装箱に収められており、一部が近現代の資料と一緒にたんすに収められていた。免定や村入用帳など

⑥ 菱野郷倉（江戸～）

が多く、なかには浪人の取り締まりに関する資料もあり、近世菱野村の様子を探る上で欠かせない資料である。

近現代の資料は、三つのたんすと一つの木箱に収められていた。そのうち一つのたんすには「菱野自治会関係書綴」と書かれた貼り紙があり、自治会関係の資料を中心に収めてあった。自治会関係の資料は、協議費の帳簿や、用水・道路修繕の人足名簿が中心である。また、地区の消防団や警防団に関する資料がまとめて木箱に収めてあった。近現代の資料は、一部資料の混同が見られるものの、比較的内容ごとに収めてあるのが特徴である。

菱野郷倉文書のなかで注目すべき資料は、たんすの引き出しと風呂敷に収められていた近世末から近現代にかけての祭礼関係資料である。猿投山祭礼に関する資料を始め、山口八幡社でおこなわれた郷社祭の資料、祭礼の主体となる若者組の会計簿などが残されている。なかでも猿投山祭礼や郷社祭への参加をうながす回章がまとまって残されており、菱野を含めた山口（北尾張）合宿内での駆け引

きを見ることができ（『瀬戸市史民俗調査報告書』一巻第三章）。

菱野郷倉文書のうち、自治会関係と祭礼関係の資料は、保存経緯の一部がわかる。これらの資料は役員の間で引き継がれ、移動するものである。しかし、書類は毎年作成され、移動する書類の量は増えていく。そこで、年代が古い書類から、郷倉で保存するようになった。例えば、祭礼関係の資料の中で一九〇〇年代から一九六〇年代にかけての書類は、風呂敷に包んで、現在使用している書類とともに役員の間を移動していたが、二〇〇一年以降は郷倉で保存している。

菱野郷倉文書は、活用されなくなった年代の古い文書が順番に郷倉で保存されるようになったものである。これらの資料が近年の文書館にみられるように住民に公開されていたかどうかは不明であり、資料を保存した自治会関係者や祭礼関係者等による先例の確認という形で利用があったかどうかともわからない。資料が単に郷倉で保管されていただけと言えるかもしれない。それでも、菱野の住民

の間で、必要な文書は保存しておこうという意識があったことは特筆できる。菱野郷倉文書は、現在は住民共有の文化財として大切に保存されている。



菱野郷倉文書（調査前の状態）



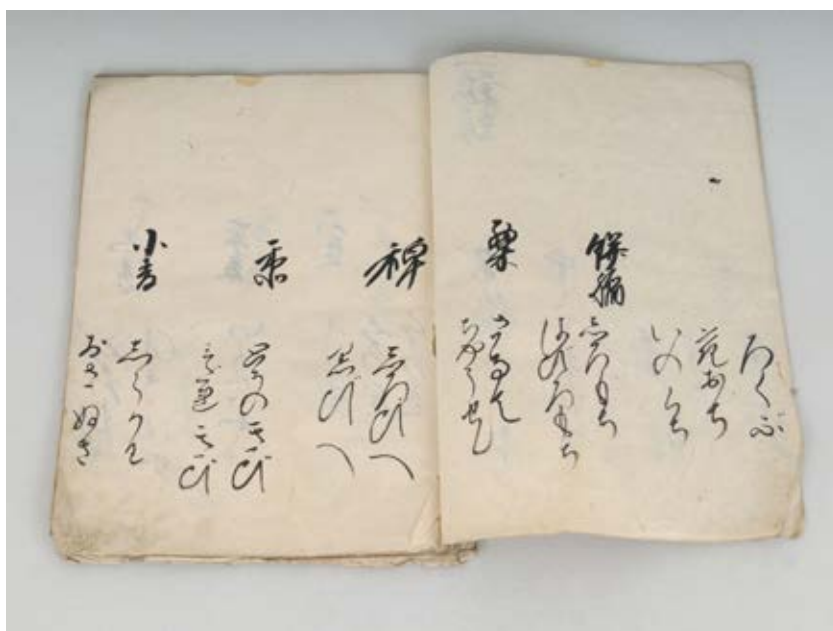
旧郷倉（東菱野町の熊野社境内）

⑥-1 菱野郷倉文書（江戸～昭和）【市指定】

菱野郷蔵には、江戸時代の年貢減免に関する証書類、上納や雑役に関する一覧類、村内物産に関する書上、村内治安に関する文書類など7780点が保管されています。

享保20年（1723）の「愛知郡山田庄菱野村産物取調帳」は、尾張藩が行った産物調査に対して出されたもので、菱野村では米9種、もち米2種、豆類もそれぞれ2・3種が栽培されていたことが分かります。これは凶作であっても作物が全滅しないよう多品種の栽培を行っていたことを示しています。

嘉永4年（1851）の「菱野村下用書上帳」は、嘉永3年分の村入用を書き上げたもので、村役人（庄屋・組頭など）の給与、紙筆墨などの事務費、橋などの普請費用、代官の村廻りの宿泊費、食費等が主な費目とされています。その内容は「村下用建札」として一般の村人に公開するよう義務付けられており、村役人の不正防止のための情報公開が行われていたことが分かります。



「愛知郡山田庄菱野村産物取調帳」（享保 20(1723) 年）



「愛知郡菱野村下用書上帳」（嘉永 4(1851) 年）

⑦ 仙寿寺

福祿山 仙寿寺の創建等については、天文 11(1542) 年以前で寛文 7(1667) 年に臨済宗から曹洞宗雲興寺末寺に改宗されたとも、享保 2(1717) 年ともいわれます。

本尊の木造聖観音坐像は鞘仏であり、その胎内にもう一体の聖観音を蔵しています。

鞘仏は江戸時代の作であり、胎内仏は、高さ 17.1cm、ヒノキ材一木造で、外面は漆箔を施しています。内刳りされた内面に下記のような墨書の銘文が確認されます。仏師「信教」は熱田在住の仏師であり、「祥応」は開眼供養した寺僧とみられます。林二郎左衛門は、永正 14 年の菱野社棟札にも檀那として名前がみえ、宝暦 2(1752) 年に成立した『張州府志』にも菱野城に居た人物と書かれています。(愛知県立芸術大学山崎孝之教授らによる文化財調査および(瀬戸市 2005『瀬戸市史 資料編三 原始・古代・中世』P298)による)。

また、室町時代制作と考えられる釈迦十六善神図(伝明兆作)も伝えられ、春季と夏季に大祭が行なわれ、ご開帳されます。



仙寿寺本尊 木造聖観音坐像 胎内仏



仙寿寺本尊 木造聖観音坐像 (左：胎内仏 右：鞘仏)



胎内仏 腹内側墨書銘

(腹内側)
 仏師者信教
 祥応
 林二郎左衛門□

↑林二郎左衛門か

(背内側)
 大□二年
 戊寅 癸酉
 四月二日

↑大永二年か

白 敬

胎内仏 内側墨書銘文

